



Title	幕末・維新时期における国学思想の研究
Author(s)	桑原, 恵
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44495
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	桑原 恵 <small>くわ はら めぐみ</small>
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 17423 号
学位授与年月日	平成15年1月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	幕末・維新时期における国学思想の研究
論文審査委員	(主査) 教授 猪飼 隆明 (副査) 教授 平 雅行 教授 村田 路人

論文内容の要旨

本論文は、日本の近世後期から幕末・維新时期にかけて展開した国学思想について、「産霊」の思想と、政治運動思想の展開に焦点を当てて論じたものである。論文は、序論を除いて七章に補論を加えた八章からなり、全体は四〇〇字詰め原稿用紙に換算しておよそ七九〇枚に及ぶものである。

本論文は、これまでの国学研究が、「被治者論」的分析に片寄っている、すなわち国学思想が明治政府による神道教化政策の中心思想として、天皇に忠実な臣民形成に果たした役割を重視する傾向にあるのにたいして、国学思想がそれ自身としてもつ可能性、また国学思想の枠組みを超えようとする在地の国学者の思想形成について論じている。

第一章「中盛彬の思想Ⅰ－『産霊』と『人』－」では、大坂泉州熊取谷（現大阪府泉南郡熊取町）の大庄屋で、国学者として思想形成をおこない、同時に西洋天文学をも学んだ中盛彬を取りあげる。中盛彬については、『拾遺泉州志』に郷土史の史料として、かれの著作『かりそめのひとりごと』が紹介されているだけで、ほかの多くの著作はもちろん、その思想の独創性もほとんど知られてはいない。論者は、中盛彬の多くの著作を検討することによって、かれが「産霊」の思想を独自に展開させていることを発見した。すなわち「あめつちいまだわからざりし」「ただむなしきうつにして、なづくべきものもあらず。これといふべきもなく、そのいろハ、たとハバすみとあけとをみづにをとして、かきまじへしごとくになもありけらし」、宇宙の最初の混沌とした状況に「もといろ」「むすびのいろ」と表現される「産霊」、つまり宇宙創生の原理があり、それが神（造化三神＝天之御中主・神産霊神・高産霊神）を創造し、その神の意志によって地球は主宰されるとする。すなわち、「神」を宇宙の創造主として措定するのではなく、宇宙の本来の性質とも言うべき「産霊」が凝集されたものが「神」であると、盛彬はいうのである。また、この「産霊」についての独創的認識が、山片蟠桃の『夢ノ代』に紹介されているような太陽系を相対化させる思想を手に入れることができたと指摘する。盛彬は、地動説にたち、「産霊」によって持（産）ばれた、無数の恒星の存在、太陽系と同等の宇宙の無数の存在を信じ、地球を含む恒星や宇宙相互間は平等な関係を持ち、この認識からは「皇国」と「外国」の区別さえ何の意味も無くなってくると説く。

第二章「中盛彬の思想Ⅱ－『産霊』と『和歌』－」では、「産霊」とかかわる「結ぶ」という行為を、「言霊」の「結び」としての和歌論として、盛彬が独創的な「言霊」観、「産霊」観へと発展させ、「人」は、事物を現出させる「結ぶ」行為の主体として描かれていることを明らかにしている。

第三章「近世後期の〈産霊〉の思想について」では、以上の盛彬の「産霊」の思想を、本居宣長・平田篤胤とともにとくに佐藤信淵等の「産霊」思想と比較して、その独自性を明らかにした。

第四章「中瑞雲斎の政治運動思想」、第五章「尊王攘夷運動思想における『主体』形成」では、盛彬の義理の弟である中瑞雲斎が同じく国学思想を基礎に尊王攘夷運動に身を投じ、とくに崇徳天皇神靈遷還運動に奔走するが、やがて明治政府の開化政策と衝突する。しかし、かれは自らの行動を「神の支持」を受け、「神と感応」した「正義」と主張する。論者は、ここにも矛盾をはらみつつも国学の枠組みを越えた思想を読み取るのである。

第六章「幕末・維新期の『正義』の主張と『朝憲』」では、維新期の草莽層の反政府運動において自己の正当性・「正義」の根拠に「朝憲」、すなわち叡慮の貫徹を目指す思想があることを明らかにし、ここに神の意思を読み取ろうとする。

そして第七章「幕末・維新期の『産霊』の思想と神道教化」は、矢野玄道の思想と行動の分析を通して、「産霊」の思想は維新政府の神道教化政策に引き継がれたと主張する。

なお、補論「近代化過程における『家』と『自己』」は、中盛彬や中瑞雲斎にみられる、思想形成の起点としての「家」意識の問題と「自己」認識との関係を、「皇国」や「産霊」思想の展開の中に位置づける試みをおこなっている。

論文審査の結果の要旨

国学思想が、幕末・維新期には、本居宣長や平田篤胤などの頂点的思想家の手を離れて、草莽層の中に深く浸透したことは周知のことである。また賀茂真淵や本居宣長らが「唐心」を廃して「大和心」の探求に腐心したのにたいして、それをうけた平田派の国学が、現実的運動の中で、西洋思想をキリスト教まで含めて、マキャベリスティックに吸収したことも知られたことである。しかしまた、島崎藤村の『夜明け前』の青山半蔵の運命が象徴するように、国学は結局は国民の主体形成にとっては限界を示し、天皇制イデオロギーに包摂される、と理解されてきた。

しかし、本論文は、国学が、中盛彬において「産霊」についての独自の認識を展開させることによって、国学的枠組みを越えた、新たな世界観の形成、新たな主体形成に寄与できること、また中瑞雲斎を含めた多くの草莽層が、神の意志を請けた「朝憲」の思想を膨らませることによって、近代天皇制（イデオロギー）を相対化させることができていること、を明らかにした。これは、国学についてのこれまでの認識の転換を迫るものであり、草莽層においては、国学をこのように独自に発展させる可能性のあることを示唆したのである。

本論文は、中盛彬らの史料についての綿密な分析、それ以上に豊かな分析とでも言ってよい分析を示してくれている。論者の初期の論文（第四・五章）には、思想の分析としても政治運動の分析としても中途半端なものがないわけではないが、豊かな思想史分析に結実しつつあり、国学研究はもとより維新史研究にも重要な視点を投げかけているのである。よって、ここに本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものであると認定する。